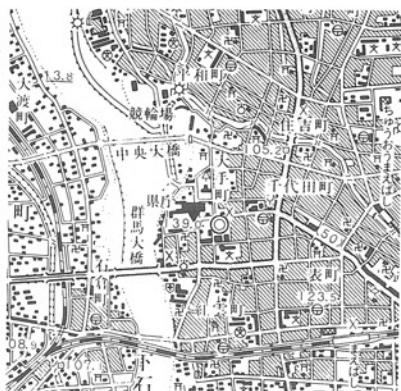


群馬・前橋城遺跡

まえばしじょう

- 1 所在地 群馬県前橋市大手町
- 2 調査期間 第三次調査 一九九三年(平5) 四月～九月
- 3 発掘機関 群馬県教育委員会
- 4 調査担当者 相京建史・桜岡正信・井川達雄・藤巻幸男・片野雄介ほか
- 5 遺跡の種類 集落跡・城跡
- 6 遺跡の年代 九～一九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

前橋城遺跡は前橋市街地西寄りの群馬県庁構内に位置している。



(前橋)

前橋城は中世の厩橋城を原型とし、近世に酒井氏が藩主となって以降大規模に整備されていき、城の名も前橋城と改名された。途中藩主は松平氏に替わり、幕末に再度改築を行なった。現在の群馬県庁は、幕末の前橋城本丸跡に建てられて

おり、現在も敷地の北側に当時の土塁が残っている。

遺跡の立地は、前橋台地と呼ばれる平坦な台地上の北端部であり、すぐ西側は利根川の開析を受けて、一〇m以上の崖面が形成されている。標高は約一〇八mである。

前橋城遺跡の調査は、県庁舎建設に伴うものであり、群馬県教育委員会が一九九一年度から七次にわたって発掘調査を実施した。

第三次調査は、幕末の本丸の南東隅にあたる部分の約一九〇〇㎡を対象として実施した。調査の結果、平安時代の竪穴住居や溝、厩橋城関連と思われる中世の堀、近世の堀では、城の改修時のものと考えられる大量の河原石で作られた堀中腹のテラスと石垣、多くの井戸跡などの遺構が検出された。

木簡が出土した遺構は、調査区西部で検出した第一号井戸である。この井戸は上から三m付近までが大きく掘り込まれて中段を作り、中段からは径の小さな掘方になる形をしており、規模は広い部分の径が約三m、狭い部分の径が約一m、深さが約七・九mである。遺物は人為的埋土から多量の陶磁器が出土している。井戸の廃棄時期は一八世紀と推定されるが、木簡は自然堆積層からの出土であり、井戸使用中のものと考えられる。

なお、すでに本誌第一七号で紹介した第五次調査(一九九四年四月～九月)出土木簡について補足する。第五次調査は、本城門北側に当たる約四五〇〇㎡を対象として実施した。平安時代の竪穴住居

や溝、中世の溝、酒井氏時代の庭園の池、松平氏時代の本丸御殿玄関の基礎と御殿などの建物を囲む石組みの溝斗、多数の井戸などを検出した。

木簡が出土したのは、調査区のはば中央で検出した第七号井戸と、第七号井戸の西数mの位置で検出した第一五号井戸、及び調査区北西部で検出した第六九号井戸であるが、このうち第七号井戸で出土した付札木簡二点については、既に本誌第一七号で報告済みである。

第一五号井戸は、河原石を六五段程積み上げた井戸側を持ち、内径が約一・二m、深さ約九・一mである。石組みの基礎には丸太の井桁が組まれている。出土遺物は人為的埋土に集中しており、多量の陶磁器片のほか、焼塩壺、包丁、魚や動物の骨、漆碗などの木製品が出土している。木簡は覆土よりの出土で、位置は不明である。

第六九号井戸は、河原石を二二段程度積み上げた井戸側を持ち、内径が約一・三m、深さ約五・四mである。石組みの基礎には丸太の井桁が二段に組まれている。出土遺物は、人為的埋土より瓦が大量に出土したほか、砥石、下駄、靴底などが出土した。木簡は確認面から深さ三〜四m付近の人為的に埋められた土層中より出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 第三次調査

第一号井戸跡

(1) 費 五斗五合 □取石町 □屋 (291)×46×3 019

(1)は、上端部は欠損しているが、側面及び下端部は原形をとどめているものと思われる。城下「□取石町」の「□屋」から買い上げた物品に関するものであろう。購入した物品の数量と値段を書き記した帳簿・伝票のようなもの、もしくは物品の購入に際して城内の部署同士でやりとりした文書であらう。なお「□取石町」が何処なのかは不明である。

二 第五次調査

第一五号井戸跡

(2) □月廿日 (36)×(106)×1 065

第六九号井戸跡

(3) ・不役之輩 □□助江

□□□□より遇丁

□□晚鐘(花押)

・(絵画)

└ (216)×45×1 019

(2)は、台形状を呈する薄い断片だが、月と日の記載が見える。元々木簡であったものを二次的に何らかの部材に転用したものと考えられる。木簡の内容・用途については不明である。

(3)は、長方形の縦長の材を使用した文書木簡である。上半部欠損。両側面一部欠損。下端部はほぼ原形をとどめている。具体的な内容の部分が欠損しているので不明であるが、「不役之輩」「助」に宛てて何らかの指示を出したものと思われる。「晩鐘」は、一見すると人名とは考えにくいかもしれないが、前後の文脈や末尾に花押が記されている点からみて、差出人の名前と考えるべきであろう。近年、近世遺跡の発掘調査件数の飛躍的増加に伴い、近世木簡の類例が増大しつつあるが、このような授受関係を示す文書木簡の出土は珍しい。なお、裏面には絵の一部とおぼしき墨付きがある。

9 関係文献

群馬県教育委員会『姿を現した前橋城』（一九九五年）
同『前橋城遺跡』Ⅰ（一九九七年）

（1）片野雄介
（8・9）高島英之

